

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 馬場 基

馬場基氏の論文『日本古代木簡論』は、日本古代の木簡について、文献史学・考古学という枠組みをこえて史料学的分析を行い、古代東アジアも視野に入れて「木簡の作法論」を提唱して木簡の考察に新たな視座を提示したもので、貴重な研究成果である。

第一部「木簡の位相」では、調庸などの貢進物につけられる荷札木簡をとりあげ、同じ荷物に複数つけられた同文の荷札を分析し、駿河国調堅魚木簡の追記の分析から具体的な荷札作成過程を考察し、荷札木簡は帳簿の分身であることを明らかにした。一方で贅木簡の一部は貢納表示の機能をもっていることも主張している。そのほか隠岐国の木簡にみえる記載形式の変化、塩荷札木簡にみえる塩の種類・産地と律令国家の塩政策のあり方、題籤軸の使用と廃棄などを論じて独創的な結論を示している。木簡の材質について、針葉樹と広葉樹の使い分けから西海道や隠岐国での木簡使用の特徴を論じていることは、奈良文化財研究所で平城京発掘の最前線にいる著者ならではの分析と評価できる。

第二部「木簡の作法」では、人との関わりと木簡が道具の一つであることを重視して「木簡の作法」という分析視点を提示する。木簡のもつ手続きとしての機能や形状のメッセージ性、口頭伝達との関係を分析し、木簡の運用は制度と実態を結びつける存在だとする。韓国で出土する木簡を分析し、百済と新羅でそれぞれの木簡文化が存在したと想定し、日本古代木簡は百済の系譜を引くが、木簡の出現は一〇〇年遅い、それは七世紀末の百済滅亡を契機に木簡運営のノウハウやシステムが成立したためと推測する。さらに手で紙を持って文字を書く書写技法に注目して、中国・朝鮮半島での様相を分析して、古代日本の筆写の状況は中国南北朝期のそれと近く、朝鮮半島、百済から伝えられたと推測した。補論では中国簡牘研究の論集の書評の形をとって、自らの木簡研究の方向性を示している。

本論文は、古代史研究に新たな光を与える出土史料である木簡について、想像力豊かに、新たに方法論を開拓しようとした意欲的な試みである。荷札木簡の機能について説得力ある結論を示したこと、木簡文化を広く東アジアの中でとらえようとしていることが特記できよう。ただし第一部の近世史料の引用に不備があること、「作法」という用語がやや感覚的で曖昧さを残すこと、韓国木簡の具体的揭示や論述が不足していることなど今後の検討を期待すべき点もあるが、高度で精緻な研究成果であることは言うまでもない。

以上より本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのにふさわしい独創性の高い業績として認めるものである。